2022年度　初芝立命館中学校・高等学校　学校評価

1　教育目標

○　確かな学力を身に着け、主体的に学び考えることのできる知的探究心にあふれた人間を育成する。
○　心も体も健全でたくましく、社会の担い手にふさわしい知性と品格を身に着けた心豊かな人間を育成する。
○　グローバル社会における文化の多様性を理解したうえで、自分らしさを大切にし、世界を視野に幅広く活躍できる人間を育成する。

2　中期的目標

1　新しい教育の展開準備
2　学則定員の変更
3　本校独自の教育理念の打ち出し
4　近隣から大阪からの入学者確保への取り組み
5　各コースの先鋭的・特色的な教育内容の実現
6「開かれた学校」に向けた、教育活動の展開
7　高校制服変更への準備

3　学校教育の自己診断と学校関係者評価委員会の意見

学校教育自己診断の結果と分析	学校関係者評価委員会からの意見
1．学校評価について ①一昨年度から続く新型コロナウィルス感染症の影響を受け、学校運営は行事を延期、規模を縮小して実施するなどした。一方、前年度と比較すると平時の教育活動が再開され、制限がある中で、可能な限りの生徒の活動が実施できた。多くの情報共有と教職員の臨機応変な対応により、厳しい状況を乗り越えることができた。 ②中学への志願者増、高等学校における専願志願者数、内部進学者数の増加等にみられるように、大阪南部にて、社会的な評価が上がり、一定の評価を受けることができた。積極的な広報活動により受験者数が増加した。新しい教育を目指す本校の教育方針が訴求力を高めていることが要因であると考えられる。 ③新しい教育実践に向けて、校内のタスクフォースによる議論が進められたことは大きな成果である。SSH（スーパーサイエンスハイスクール）の採択には至らなかったが、申請に向けて校内で議論が活発に行われ、教員間に理系教育の実践に向けた機運が上がっている。また、国際コース《仮称》の 2024 年度設置に向けて、議論が行われ、設置に向けた具体的な構想案ができたことは今後につながった。 2．保護者アンケート結果について 中高ともに「わが子を入学させてよかった」の項目において、91%の保護者が肯定的な回答をしている。また、肯定的な回答が8割程度ある回答が増加し、5割以下となる否定的な回答はなく、保護者の学校への評価は高い水準で推移している。 3. 授業評価について 中高ともに高いレベルで推移している。しかしながら、「活用」「学習効果」の項目においては、顕著な向上は見られず、授業の質の改善や生徒主体の授業への移行などを通して、生徒の学習効果を高めることを目指す。	①委員会の体制 学校法人立命館常務理事　1名 立命館大学教授　1名 中学校・高等学校保護者会会長　1名 地域の有識者　1名 校長、教頭 ②委員会の実施日 2023 年 4 月 17 日（一部委員はオンラインによる参加） ③自己評価の結果に対する評価 ・募集状況は好調で、成績優秀な生徒が集まっている。立命館コースの特色としては、女子を中心に理系人材の育成に重点を置いて、しっかりと連携していきたい。 ・国際コースの立ち上げに関しては、異文化理解の手段や、視野を広げるための手段として英語を学び、早くから世界を見据えた見方ができる児童、生徒の育成を期待している。 ・堺市東区民の大多数がこの土地を「安心・安全で落ち着いた住環境である」と感じている。学校はこの地域の大事な財産であるので、今後も地域と学校がともに連携協働し、教育・文化の街づくりができればよいのではないか。 ・初芝立命館が目指す「新しい教育」が、これからの時代に必要な力、それぞれが個性を生かして認め合うような教育であることが理解できた。 ・学校のこと、生徒のことをよく考えてくれているのが理解できた。安心して子どもを学校に任せられる。

4　本年度の取り組みと達成状況

中期的目標	今年度の重点目標	具体的な取組計画・内容	評価指標	自己評価	次年度に向けての改善策
1　新しい教育の展開準備	(1) SSH（スーパーサイエンスハイスクール）の申請	①タスクフォース設置 ・週1回の会議を設定 ・サイエンスとテクノロジーを重視した理数教育の内容を検討	①タスクフォース会議の実施回数	①理科・数学の教員を中心にSSHタスクフォースを編成、毎週金曜日に 21 回実施した。その結果、STEAM 教育を通して世界の課題を考えられる生徒の育成プログラムを設定した	・採択にはならなかったが、予定していた理数教育は実施、再度申請予定
		②理数系・SSH の学校を視察	②理系先進校の視察校数	②仙台第三高校、若狭高校、青翔開智高校など7校を視察	・理数科の設置を検討
		③外部(立命館大学)との事前調整 ・運営指導委員会の設置 ・コーディネーターの依頼	③立命館大学と調整できたか	③立命館大学理工学部長を委員長とし、大学、企業より5名の SSH 運営指導委員会を設置した。さらに、立命館大学理工学部の大学院生にコーディネーターを依頼した。	
		④申請	④申請できたか、採択を受けたか	④12 月に申請したが、採択を受けることはできなかった	
	(2) 国際コース設置の検討	①タスクフォースの設置 ・週1回の会議を設定 ・高い英語力を目標とし、海外大学進学を目指す教育内容を検討 ・留学、推薦制度などの調整	①タスクフォース会議の実施回数	①英語・社会の教員を中心に国際コースタスクフォースを編成、会議を毎週火曜日に 15 回実施 ・イマージョン教育、ターム留学、探究学習などを中心に、学園小学校から引き継ぐ 12 年の教育内容等を検討 ・西オーストラリア州政府へ協力を依頼し承諾を得た	・西オーストラリア州との連携と具体化
		②国際コース、IB の学校を視察	②国際コース、IB 教育実践校の視察校数	②三田国際、広尾学園等8校を視察	・生徒受け入れのための詳細を決定、フォーラムなど広報活動の実施
		③募集、広報活動の準備・計画	③国際コースの設置を告知、イベントの計画ができたか	③2023 年 5 月に国際教養大学学長モンテ・カセム氏の講演等、フォーラムを計画、決定	

	(3)施設・設備の整備	①１号館トイレ改修 ②１号館エントランスの改修 ③サイエンス関連・ICT 機器設置 ・サイエンスラボ ・デジタルサイネージの設置 ・デジタルアートルーム設置 ④中学職員室のフリーアドレス化	①改修できたか ②改修できたか ③設置できたか ④実施できたか	①８月に改修を完了 ②３月に改修を完了。生徒とのワークショップで作成した資材を使用し、生徒とともに作り上げた ③サイエンスラボは８月に立命館大学理工学部より提案があり、3D プリンタ、MR ゴーグル、インタラクティブボード、プロジェクタ、デジタルミシンなどを11月に設置完了、教員研修を行い中３生対象に授業を実施 ・デジタルサイネージは 11 月に設置完了、生徒への伝達や行事、生徒やクラブの活躍などを投影した。 ・デジタルアートルームは3月に完了、文部科学省の私立高等学校等 ICT 教育設備整備推進事業費を利用し、STEAM 教育を重視した教育活動推進のため、情報教室の Windows PC50 台を iMac20 台に入れ替えた ④3 月に完了。教員のスムーズなコミュニケーションが可能となり、生徒の状況や教科について教員間での共有が可能になった	・生徒数増加に合わせ、教室数の確保と、施設のさらなる整備が必要 ・STEAM 教育の実践、平常授業や土曜講座での活用を予定 ・業務の効率化、教員間のコミュニケーション促進
２ 学則定員の変更	中学の学則定員を増員し、高校（普通科）の学則定員を減ずる	高校（普通科）学則定員の変更 1,320 名⇒1,200 名 中学学則定員の変更 360 名⇒540 名	2023,4,1 施行を目指し申請し認可されたか	高校：2023 年 3 月 14 日認可 中学：2023 年 3 月 14 日認可	中高ともに学則定員充足に向けて募集活動の強化が必要
３ 本校独自の教育理念の打ち出し	（1）6 か年プログラムの打ち出し	本校独自のフィロソフィーを体現するプログラムの体系化	中高6年間のプログラムを実施できたか	教育理念の打ち出しは一つのタスクフォースとして設定していたが、前進させることはできなかった。	来年度カリキュラムマネジメントと連動させたプログラムの体系化を進める。
	（2）総合的な探究の時間の授業運営と本校の特色化	①新課程における探究授業の実施 ②中学総合授業の特色化	①外部講師を招いた講演会の実施回数 ②中学校でテーマに沿った総合授業が実施されたか	①講演会は 10 回実施。生徒に新しい知識や興味関心を引き起こすものとなった。次年度に向けてはその知識を生徒自らがどのように活用していくのかが課題。 ②ダイバーシティや環境、地域貢献などをテーマに、グループワークや発表などが多く実践され生徒主体の学びが促進された。	
	(3) 特色ある宿泊行事の設定	①高校研修旅行実施 ②中学研修旅行実施	①研修旅行を実施できたか ②研修旅行でのプログラムを実施できたか	①対馬方面、五島列島、関東方面、東北・北海道4方面での探究学習を核とした研修旅行を実施し、生徒の学びを深化させた ②鎌倉での留学生との交流、千葉での地域貢献は、複数のテーマがあったが、どの活動も積極的な生徒の参加があり、良いものとなった。	来年度は海外研修を再開し、より特色ある研修旅行の実現を目指したい。
４ 近隣から大阪からの入学者確保への取り組み	(1)中学校募集の比重の拡大	高学力層の志願者増をはかるため ①自己推薦型入試を除く全日程・方式の専併別募集廃止 ②複数回受験加点制度の導入 ③専願型（Ｓ）特待と他校受験型（Ｔ）特待の２種類の特別奨学金制度の整備 ④煌入試Ⅰ・Ⅱの発展的解消と小学校成績基準による出願資格認定を厳正化した新方式「みらい入試 21」の導入	①・②・③ 出願者数が増加したか ④新方式「みらい入試２１」が導入できたか	①・②・③ ・出願者数は 967 名で、前年度比 303 名(46%)増加した。そのうち初日の午前日程が 44 名(66%)増加。 ・入学者数は 163 名で、前年度比 24 名増加した。そのうち初日の午前日程が 23 名増加。 ・3 つの具体策の相乗効果により、非常に高いレベルで目標を達成した。 ④「みらい入試２１」を導入した結果、Ｓ特待5名・Ｔ特待1名の入学生があった。面接評価も高かった。新制度導入初年度でもあり、継続的な検証が必要ではあるが、当初の目標は達成できた。	・新設予定の国際(ＵＳ)コースで 30 名の入学者数を確保する。 ・新コースの広報も含め、小学校中学年児童を対象とした WEB による情報発信をスタートする。
	(2)大阪市域・北摂地域を重点エリアとし、募集	①北摂・大阪市域に展開する大手塾とのさらなる連携強化	①出願者数	①非常に高いレベルで目標を達成した。 ・中学入試	・大阪市域・北摂地域を重点エリアとして募集

		②近隣主要塾との連携強化	②出願者数	大阪市域・北摂の出願者416名で、前年度比160名(63%)増加 ・高校入試 大阪市域・北摂の出願者110名で前年度比45名(69%)増加 ②中学入試は非常に高いレベルで目標を達成した。高校入試は、全体としての目標は達成したが、近隣からの出願者数が微減したことは、取り組むべき課題である。 ・中学入試 堺・泉北・南河内の出願者340名で前年度比123名(57%)増加。 ・高校入試 堺・泉北・南河内の出願者629名で前年度比7名(1%)減少。	活動を展開する。 ・高校入試制度の見直しをはかる。
5　各コースの先鋭的・特色的な教育内容の実現	(1)立命館コースの特色化	①グローバル人材の育成 ・中高全学年でネイティブによる授業 ・オンライン英会話・アプリの活用 ・Global English Camp 実施 ・APU 卒社会人講演実施 ・APU ツアー実施 ②理系人材育成 ・理工学部との連携 ・理工学部卒社会人講演 ・プログラミング講座 ・BKC 研修 ③附属型を生かした教育 ・高大連携企画（立命館 DAY や R Career Week） ・課題研究（論文・発表会） ・入学前教育 ・Ｒ推奨・土曜講座 ・検証試験をゴールとしない、TOEFL や活動を奨励する仕組み作りの準備	①TOEFL スコア(480点)を10名 英語到達度検証試験・推薦基準到達100%、追加題基準到達80% APU 進学者数増加 ②理系枠の充足率80%、理工学部進学者数 ③プログラム実施と内規の改訂ができたか	①TOEFL480 以上 3 名、英語検証試験・推薦基準到達は100%、追加題基準到達79.2%であった。 ＡＰＵツアー参加は2名（高2生の希望者は12名に増加）だった。 ②理系枠の充足率は 73.1%だった。理工学部に 20 名進学（昨年度7名）し、「サイエンスラボ」を始動した。 ③附属型を生かしたプログラムとして、高大連携企画、課題研究、入学前教育、土曜講座を実施した。 ・生徒にとって自分の適性やキャリアについて考える機会となった ・論文集を作成し、代表者発表を実施した。 ・学部ごとの講座を実施、また、理系進学生徒へプレエントランステストと講義を実施。 ・科学×英語、地域観光学などの教科横断型の講座や、ハイレベル数学など中上位層引き上げのための講座を実施 ・2023 年度に向けて加点措置を改訂し、TOEFL や理系・IT 系の資格の取得や、英語・理系のコンテストや大会などの参加を推奨する仕組みに変更、また模試受検を TOEFL 受検に変更した。	・1 年 3 学期から TOEFL 受検を実施 ・保護者・生徒向け APU ツアーを拡大し、APU を勧める ・サイエンスラボの運用 ・コース独自の教育を推進、探究活動とキャリア教育をさらに充実させる
	(2)アドバンスト・グローバルコースの大学進学実績向上	①国公立大学・関関同立・早慶への進学指導強化 ・生徒対象進路座談会 ・教員情報交換会 ・総合型・学校推薦型入試説明会 ・小論文・志望理由書・面接講座 ・土曜講座（ハイレベル講座） ②模試の分析と対策、検証のサイクルをもとにした弱点補強 ・各回模試の分析・報告 ・弱点のフォロー強化 ③進路実現に向けた6年間のキャリア教育推進 ・高1進路達成プログラム ・スタディサプリ進路選択支援プログラム ・大学キャンパス見学会実施	①各大学合格者数 国公立大学30名 関関同立70名 早慶 GMARCH3 名 ②模試結果の向上があったか ③プログラムの実施数	①国公立大学の合格者 23 名で目標達成できず。関関同立は 71 名で目標達成。早慶 GMARCH は 3 名で目標達成。 ・HR,2学期終業式、3学期始業式に受験に向けての進路講話を実施。 ・7月に小論文講座を実施。 ・面接、志望理由書講座は、84 名(昨年 54 人)が受講。個別に国語科・担任・進路指導部で小論文・志望理由書・面接の指導も実施。総合選抜型の国公立大学 4 名、私立大学 35 名の合格につながった。 ②模試の分析・対策・検証のサイクルを実施した。 ・各回模試において進路指導部で模試の分析を行い、その分析による弱点補強を放課後講座で実施した。次回模試で成績上昇の効果が見られた教科もあった。 ③各学年でキャリア教育プログラムを実施した。 ・高1の2学期に進路達成プログラム(ベネッセ)を実施。 ・高 2 の 2 学期にスタディサプリ for school の進路選択支援プログラム(リクルート)を実施、3学期に志望理由書講座(学研)を実施。 ・6月に大学キャンパス見学会を実	・国公立 50 名、総合型選抜での国公立・関関同立・早慶の合格者増加、学習モチベーションの向上 ・データ分析と対策・検証のサイクル。放課後講習のあり方 ・キャリア形成への企画実施

		④海外大学進学指導 ・海外大学説明会の実施	④海外大学合格者数 5 名	施。高校 1 ～3 年の生徒 68 名が参加。（大阪公立 39 名・関大 11 名・関学 18 名） ④海外大学合格 5 名 ・1 名がマレーシアの大学 5 校（アジアパシフィック大学、サンウェイ大学、テイラーズ大学、もナッシュ大学、インティー大学）に合格した。	・海外大学指導については説明会の校内実施を拡大していく
6 開かれた学校に向けた教育活動の展開	(1)　教育講演会	教育講演会の実施 ・第 1 回：船橋力先生(文部科学省トビタテ!留学 JAPAN プロジェクトディレクター) ・第 2 回：斎藤幸平先生(東京大学准教授)	実施できたか	現代社会の諸問題に興味関心を持ち、自ら考え、主体的に諸問題に関わる姿勢を育成することを目的に教育講演会を 2 回開催した。 ・第 1 回目は 10 月 18 日実施。中高全生徒が参加した。船橋先生の講演と卒業生の経験を紹介、プログラムに興味を持った生徒が 8 名応募し、4 名が 1 次審査を通過した ・第 2 回目は 12 月 3 日実施。中高全生徒が参加した。資本主義における環境問題に関する内容で中学生にとっては難しかったが、一部の高校生にとっては、環境問題を違った視点で見る機会となった	今後も継続して実施、日本マイクロソフト社エバンジェリストの西脇資哲氏、ジャズピアニスト・数学教育者の中島さち子氏、自然写真家の高砂淳二氏を予定
	(2)　保護者との連携	①公開授業の実施（年 2 回） ②保護者会と連携した活動実践 ③教育後援会と連携した活動推進	①公開授業が実施できたか ②保護者会活動が実践できたか ③活動が実施されたか	①計画案に基づき 6 月と 10 月に実施した。授業を見学した保護者からの意見は好評であった ②本校オープンキャンパス、体育祭など行事の支援や、熱中症防止のための飲料水提供等の支援をいただいた ③行事やクラブ活動において、活動費で支援をいただいた	保護者とともに学校づくりをしていく
	(3)　地域や企業との連携	①地域との連携強化 ・堺市東区役所壁面に作品展示 ・北野田駅とのつながり ・インターアクト部の活動の充実 ②大学・企業との連携強化 ・立命館大学・理工学部 ・NPO 法人 CLOUDY ・Groovenauts　など ③他校との連携強化 ・立命館との連携 ・他校への視察推進	①堺市と連携した活動ができたか ②大学・企業と連携した活動ができたか ③視察校数	①堺市東区役所主催文化推進プロジェクトに、中高の生徒が参加し、作品 4 点が区役所内に展示された ・地域との関係は良好であり、卒業式には北野田駅とその周辺店舗よりお祝いのポスター掲示をいただいた ・インターアクト部は堺市のこども食堂でボランティア活動をするなど、地域との様々な活動を積極的に行っている。 ②立命館大学理工学部長による講話をオープンキャンパスで行った。1 号館に空間共有システム（サイエンスラボ）を構築し、理系人材育成に関して連携していく準備ができた。 ・アフリカ・ガーナでの支援活動を行う NPO 法人の CLOUDY と連携し、中学生への講演や教員研修を実施した。 ・AI・IT 特別講座を夏期・冬期に実施。IT 教育について Groovenauts や立命館大学と提携することができた。 ③一貫教育部、各附属校より講師を招き、教員研修を 6 回実施した。 ・SSH、国際教育、進学実績、探究などの先進校 25 校（全国）の視察を実施した。新しい実践から学ぶとともに、他校とのつながりを作ることができた	専門的な分野での教育、地域から学ぶ機会を今後も作っていく
7 高校制服変更への準備	(1) 高校制服改定	①高校制服改定委員会を設置 ②中学制服アンケート実施	①委員会の実施回数 ②アンケートを実施したか	①委員会は 6 回実施した。 中堅の教員による活発な討論が行われた。生徒の金銭的な負担軽減を目的にジャケットを共有することや高校生の特別感を引き出す高校生のみのスラックスやスカートの制定等、本校独自の制服が制作されることとなった。 ②中学生アンケートを 9 月に実施。今の制服の満足度が高いことがわかった。また、女子生徒でネクタイやスラックスを着用したいなどのニーズが高く、ジェンダレス化が進んでいることがわかった。	・2024 年度より新制服への移行準備を進める。 ・生徒会と連携し制服着用方法などをともに考える機会を持ち、生徒主体の制服改定につなげていく。

	(2) 中高服装規定変更	①中学生の制靴廃止 ②高校生の制靴廃止	①②制靴廃止ができたか	①成長期にある中学生の革靴による不調の解消を丁寧に説明し、廃止を決定した。中高ともに生徒やその保護者から高い評価が寄せられている。 ②生徒自らが学校生活に適した靴を選択し、着用することにより主体性を涵養する機会となった	気候変動も多い昨今の事情も鑑み、来年度は衣替えという概念を廃止し、生徒自らが服装を主体的に選択するシステムへと移行する。